

開成の杜

第75号 ●2007年12月18日 ●郡山女子大学大学院 ●郡山女子大学 ●郡山女子大学短期大学部 ●郡山女子大学附属高等学校 ●郡山女子大学附属幼稚園

●発行所/学校法人郡山開成学園〒963-8503 郡山市開成3丁目25番2号 ☎024(932)4848(代) <http://www.koriyama-kgc.ac.jp> ●発行人/学園長 関口富左



今朝も元氣。さあー。

(撮影 山口郁生)

学長室の窓から、開成の杜は一望の内にある。風の日は深い杜の揺れ動く葉が、時には物言いたげに見えるが、黒々とした杜は巨大なものである。

この杜は開成山大神宮の杜で、明治初年、この地の国民的開拓に際し、勅許を得て、伊勢皇大神宮の御分霊奉賛の榮を頂いてこのことと今日に至っている。当地方第一の大神宮である。緑あつてこの杜の西、地続きの空地を、学校法人郡山開成学園敷地として取得できたことを安堵している。

神社の全面東側は騒音厳しい国道49号線である。この杜の西に位置するわが学園は静寂そのもので、終日深閑とした教育環境、絶好の地である。動くものは時たま杜から飛立つ鳥の飛翔の様で、その伸びやかな様子が眼を誘う。

本学園は創立六十一年の今日まで、この校地に白亜の校舎を建ね、大学院・大学・短大・高校、さらに幼稚園と二千五百余名の学び舎であり、卒業生五万五千余名を世に送出している。

開成時(昭和二十二年四月)は、県内希少の法人立女子高等教育機関で、当初、求めて入学してきた数名の学生は、私の女学校専攻科等で教えた人四、五名であったが、今もって当時の学生たちの笑顔と緊張した様子が私の脳裏に焼きついている程で、思い出は尽きない。当時、女子の高等教育機関の希少を案じての開成であったが、



学園長 関口富左

”美しく“

文部省の認可を得て、今日に至っている。

大学は学識重視が当然のことであろうが、私は、女子の高等教育とは知の高度化のみでなく、人としての感性の高揚、美の育成を加味したいと、教科目以外に、家族会にも協力を得て、芸術鑑賞講座、教養講座を実施し、今日に至っている。

知識は高度の内容を以て、人間形成を図ることは勿論であるが、美への希求、感性教育の重視は欠かせない。都会であれば特有の日常学修もあろうが、地方では鑑賞出来にくい芸術的教養こそと、人間形成の重要な要素教育を図り、本講座は百六十回にも及ぶなど、女子教育としての特色、人としての必須の教育を実施し、時には外国の、地方の、多くは東都の。劇団四季はおなじみとなるなど、教養充実にして今日に至っている。

「あなたの専門は、趣味は」等々。この質問は一人前となる社会人に対して、また就職時、仕事に対して問う言葉である。趣味、特性等々、特に女子就業に対しては、ゆとりある教養等の有無など、人物の特性承知故の質問も多い。

美しい、優しい、意志の強さ、健康等々、性行の内に求められる要素はありえるが、将来母親となる女子に対してかかる点への教育、特に女子教育要素としての特色を求めることは、職種の如何にかかわらず有用であろう。

健康で優しく、美しきの要素の内に、当然として整えなくてはならない教養、本学芸術鑑賞講座等の実施の意味はここにある。美は男女に問わず必要且つ生きる要素であることは、人間の人間たる本質の一つである。

学校法人 郡山開成学園創設者 関口育英奨学金制度 発足

来春から入学の大学生、短大生、附属高校生を援助



関口育英 学長

本学園の建学の精神を理解し、特色に優れた、各学科の専門性を充実させ、健康で、努力を重ね、他の模範となる人物を育成するのが目的。学費の一部を援助する。

奨学金の対象は、大学、短大へ推薦入学した者。附属高校では推薦入学で卒業後、本大学、または短大への入学を希望する者となっている。

三十名に月額一万二千元支給

平成二十年度採用予定者は大学、短大、高校で各十名の計三十名。支給額は大学と短大で在籍月額二万円。高校で各一万円だが、年度ごとに新たな申請が必要。返済は原則として義務化していないが、本学園の学生、生徒として

ての学費が無くなった時、不適当な行為があった場合は中断される。または、返済の措置をとることがある。

申請方法はまず、推薦入学で応募した者で、希望者は保証人連署の申請書を在籍する中、高等学校長を経由して提出する。

そして、建学の精神を理解し本学園で学ぶ意思の強い者など、基準に合った申請者は、選考委員会の審査を経て採用決定され、来春入学の学生、生徒から支給される。

関口富左衛門学長・学長は「進学を希望するご家族の方から経済状況が厳しいとの相談を受けました。向学心のある生徒を積極的に応援できればという気持ちから、奨学金制度を創設した」と語った。

家庭寮1号館四階建て 来春新築落成

耐震・防火・防犯対策も万全 四月から入居可能

家庭寮1号館の老朽化により、新たな1号館の建設工事が進んでいる。附属幼稚園北側に鉄筋四階建て、二一室を備えた耐震・防火・防犯対策万全の安全・安心の新館が現在建設中である。落成は来春三月下旬。四月からの入居が可能である。

八月二十九日、学園および工事関係者が集い、工事現場で地鎮祭を行った。開成山大神宮の宮本宮司の祭事で清めの式が厳かに挙行され、工事の無事故を祈願した。



地鎮祭で挨拶する関口学長

地球温暖化防止に取り組む学園

福島民報社「二〇〇七「みどりの大賞」特別賞受賞

福島民報社が自然環境の保全や育成に取り組む団体等を顕彰する「みどりの大賞」で、本学園が地球環境を考える学習を続けていることが評価され、特別賞に選ばれた。九月二十九日に行われた表彰式には関口修理事長と緑川洋一管財部長長職務代理者が出席、賞状と楯（レリーフ）を受け取った。

本学園は創立五十周年記念年に関東森林管理局と契約し、国有林の中に「開成の杜」を設け植樹等を通して地球環境保全、緑化思想の大切さを学んできた。

郡山市近郊の熱海町地内の鞍手山には檜五千五百本。高土山に杉四千三百本。石壁に檜七千本を学生、生徒、教職員の全員の手で植樹。学校林を設置した。

平成年十九年度 リデュース・リユース・リサイクル 推進協議会 会長賞受賞

環境型社会を目指す環境対策「3R」分別処理の徹底を図る

本学園は平成二年九月十二日、「環境宣言」と共に行動指針や環境活動を定め環境保全活動に積極的に取り組んでいる。

本年度は地球温暖化防止の一環として廃棄物排出量の削減を目指す。本館一階学生ホールにリサイクルコーナー（写真）を拡大充実、分別ボックスを増やし、一般廃棄物の再資源化を図っている。目標は前年度より一般廃棄物排出量を二％、三・五トン削減を予定。また、年間千本以上使用する乾電池ゴミを充電式に変更し、乾電池ゴミを

その後、学生、生徒代表が毎年、成育状況を調査し、四月二十二日の学園創立記念日の式典でビデオとナレーションで報告。すくすく伸びる木々の成長ぶりを知り「自然を凝視して師としよう」を全員の思いとした。

また、学生、生徒は保育下刈り、掘枝払いの林業体験を行い、森林の公益機能の維持や増進がいかに地球環境に必要なかを学んだ。

関口富左衛門学長は「学生、生徒には、人間は自然との共存ではなく、自然に生かされていることを感じてほしい」と受賞を機に改めて語った。

今後とも学有林「開成の杜」の保全、管理に努め「緑化思想」を推進することになっている。



分別ボックスを設置したリサイクルコーナー



高土山での創立50周年記念植樹



ハンパルで賞品をリサイクルを呼びかける(写真提供:福島民報社)

自作自演でリサイクルを呼びかけ
—短大・幼児教育学科—

ゴミゼロを訴えて郡山市や福島民友新聞社が主催する「クリーンフェスティバル2007」を締め括る「リサイクルを考えるステーション」が十月二十七日、開催された。本短大・幼児教育学科の学生有志がステージを飾り、ハンドベル演奏や自作自演のオペレッタやリズム劇でリサイクルの大切さを訴えた。幼児教育学科(旧保育科)は、このキャンペーンが始まった十年前から参加し、地球を守ろうと「環境保全」を呼びかけている。

天皇皇后秋の園遊会

本学園関口修理事長が招待される

天皇、皇后陛下主催の秋の園遊会が十月二十五日、東京・元赤坂の赤坂御苑で開催された。この日招待された各界の功労者や自治体の首長らとその配偶者約二千人が庭園を散策した。

天皇、皇后陛下が主だった招待者に気軽にお声を掛けられるなど、和やかなムードの中で進められた。本学園理事長、関口修ご夫妻も招待され、両陛下と間近に接し、感激も一入であった。

全学あげて避難訓練 地震に備える

地震に備えて、十一月二十一日、大学、短大の全学生、教職員を対象に緊急地震速報を使用した初の避難訓練が行われた。

緊急地震速報を受信する装置、「デジタルなまぐさ」の設置を期に非常時の自主防災対応のチェック、避難手順等の確認を図ったもの。千四百人が参加した。

午後十二時五十分、震度五強の地震発生をキッカにした緊急地震速報が学内放送から流れた。各教室では放送を聞いた学生がまず自分の身を守るために机の下に隠れた。揺れが治まったあと教職員の指導、誘導で校舎から避難した。

避難所では学生の点呼、人数確認が行われ、各学科主任に届いた報告が次々と対策本部に届いた。学生達は本番に備えた訓練を体験し、非常時への対応を学んだ。

平成十九年度 高原学校 大学・短大

裏磐梯の自然の中で
教師と学生が相互理解を深める

大自然の中で、規則正しい団体宿泊研修を行い、学生生活の後半に向けての勉学、精神、健康のより一層の充実を図る平成十九年度高原学校が裏磐梯のホテルで開催された。

十月三日から六日までの四日間、大学三年生と短大二年生の合わせて五百七十四名が参加した。今年度は天候に恵まれて、裏磐梯は散策を楽しむのに絶好な日々となり、自然のなかで教師と学生が三々五々語り合う姿が見られた。

山田副学長が講話

一泊二日の日程で行われた研修は初日の開講式で郡山女子大学、郡山女子短期大学、郡山大学、山田幸二教授が「社会で生きる力」と題して講話した。

この中で山田副学長は「人生八十年の長寿社会で健康で豊かな生活を営むためには、健康、食生活、思いやり等の人間性の健全な習慣を維持しなければならない」と述べ、さらに「基礎学力、コミュニケーション能力、責任感、他人とかかわる力を、社会が求めている。このために本学では、人格の形成、

短大音楽科 定期演奏会 見事な演奏で喝采を浴びる



音楽科の定期演奏会

短期大学部音楽科の第三十八回定期演奏会が十月二十一日、郡山市民文化センターで開催された。

学生全員による大合唱で開幕。続いて、学生がモーツァルトやショパンの名曲を独奏や独唱で披露、学びの成果を示した。最後には大編成の郡山開成学園オーケストラがベートーヴェンの「エグモント序曲」を演奏した。

本音楽科は県内で唯一の大学にある専門科で、その存在を示す定期演奏会には毎回多くの市民が詰めかけており、この日も三百名の観客が学生に惜しみない拍手を贈っていた。

「個々人の能力の開発」、「新たな知見の創造」等の学問を中心に教育と研究を進めている。皆さんは尊敬・責任・自由の建学の精神のもと人間守護の家政学を学び、世界平和と人類福祉に貢献できる力を養ってほしい」と述べ、「世界の中で最も価値あるものは健康と思いやりである」とまとめた。

この後、各学科、専攻別に分かれて研修に入り、来春までの学業への取り組み等についての認識を新たにしました。

附属高校では10月15日から19日まで、2年生が4班に分かれて修学旅行を実施した。本年度は新コース「台湾」もあり、思い思いの見聞で「自分探し」の学びの旅となった。

特集

学びの旅

附属高校修学旅行



世界三大美食の中部料理を本場で学ぶ食文化科



広島で平和を学ぶ



美しい海よ 永遠に



調神の千手観音で平和を祈った一行

●平和の尊さを知る―沖縄

私たちのコースは、夏の沖縄へ行ってきました。マンガロープの森と美しい海、そして独自の文化と歴史が息づく美しい島でした。特に、衝撃にも近い印象を受けたのは、ひめゆりの塔や平和祈念公園でした。沖縄は美しいだけでなく、悲しく辛い歴史を背負って

きた島であることを、まざまざと見せつけられた思いがしました。当時の資料や映像を見て、戦争の実相を知り、その残酷さや恐怖を痛感し、命と平和の尊さを伝えることの大切さを学びました。この体験を今後に生かしていきたいと思っています。

(二年一組 高橋恵里奈)

●ちゅら海でマリンスポーツ体験

スポーツ健康系コースの私たちは初めての沖縄でいろいろなものを見て、聞いて多くを学んできました。平和学習では沖縄戦について学び、心が痛みました。今こうして平和に暮らしている事は本当に幸福なことだと実感しました。また、伊江島の青い空と美しい

海でのマリンスポーツ体験は一生心に残るものでした。ウエットスーツとフィン、そしてシュノーケルをつけて海に潜りました。海中はとても美しく、決してこの海を失ってはいけなさと環境問題にも関心を持つようになった充実した五日間でした。

(スポーツ健康系 高橋沙希)

●世界遺産を巡る旅―広島・京都

人文系と音楽科は広島・関西方面を訪れました。それぞれに歴史と文化の重みを持つまことに、世界遺産を巡る旅は、とても興味深く有意義なものでした。

特に広島では、被爆体験者の方のお話をお聞きし、原爆ドームは負の遺産として、その記憶と共に

後世に伝えていかなければならないと強く思いました。古都、京都は、やはり歴史の都でした。特に班別の研修では、事前学習を十分行い、憧れの地での、楽しい思い出がたくさんでき充実した時間を過ごすことができました。

(二年五組 芳賀真里菜)

●美と食を求めて―台湾

食文化科、美術科は今年度からの新しいコース、台湾に行きました。それぞれの科の特徴に合わせて食文化科は台湾の食文化を主に学び、実際にレストランの厨房にも入って実習しました。台湾では、「衣食住」ではなく「食衣住」といういうことなりました。

美術科は何と言っても故宮博物院の見学がメインとなりました。有名な「翠玉白菜」を始めとする七十万点とも言われる故宮博物院の展示品の数々はまさに美術科生にとっては宝の山でした。この貴重な経験を今後に生かしていきたいと思っています。

(食文化科 高橋麻耶)

大学院・大学

人間守護の理念を基としてよりよい研究と実践との成果を分かち合う

【大学院】

「水と人間の生存・生活」
世界には上水を利用できない十億の人々がいる。世界の水資源の現状と課題に取り組んだ。



人間と水との関わりをテーマに

【家政学部・人間生活学科】

統一テーマ「生活に創造を求めて」
☆生活総合コース「親密な家族関係の形成」☆福祉コース「福祉に寄与する人材育成」☆建築デザインコース「風土性を考慮した福島県の住まい」について発表した。



学生が発表したテーマに関するポスターを展示中

【家政学部・食物栄養学科】

「メタボリックシンドロームの予防」をテーマに、診断基準を解説し栄養診断も行い、健康寿命を伸ばそうと呼びかけた。



メタボリックシンドロームの予防をテーマに

【レストランもみじ】

食物栄養学科と短大食物栄養専攻が合同で開設。調理実習、集団給食実習として地産の素材をふんだんに使った「もみじ彩弁当」が好評であった。



実際に調理する学生たち

短期大学部

【家政科福祉情報専攻】

「新しい家庭生活をめざして」をテーマに、手芸、染色、パソコンの実技講習を行い、手作り菓子や手芸小物を販売した。



手作り菓子や手芸小物を販売中

【家政科食物栄養専攻】

「健康と食を考える」をテーマに食育に取り組んだほか、もみじ食堂の運営に当たった。



見て、選んでのコーナー

【幼児教育学科】

「感じよう家族の輪、ともだちの輪」をテーマに音楽表現と参加型展示で家族みんな楽しんでもらった。



【生活芸術科】

グラフィックデザイン、絵画、彫刻、工芸、コンピュータ・グラフィックス、近代詩文書、茶道（略登点）等九部門で作品発表。



工芸作品を展示する学生たち

【音楽科】

「もみじ音楽会」はすべて学生による運営。ピアノ、独唱、管楽器の演奏が行われた。



管楽器の二重奏で日頃の成果を示す

【文化学科】

テーマは「流行ものの文化史」。民俗学の様々な分野から文化と流行を考察した。



流行ものを発表する学生

【高齢者招待会】

訪問介護員養成研修講座で学ぶ学生が中心となって、ケアハウスで暮らしの方々と招待。高齢者との交流を通して福祉への意識を高めた。



学生の案内で各会場を見学する高齢者

大学・短大友会

学友会は、茶道、食品化学研究、スキー、フォークソング、モダンジャズ研究、ダンス、手芸、タッチフットボール、水泳、手話、スポーツ栄養研究、フットサル、女性史研究の十三クラブが活動の発表・展示を行った。

【食品化学研究クラブ】

「香辛料を考える」
香辛料（スパイス）を様々な角度から掘り下げ、紹介した。



各種のスパイスを展示中

【手芸同好会】

手芸の楽しさを一緒に楽しんでいただいた。



体験コーナーは笑顔が一杯

【茶道クラブ】

慎思庵にて六茶席。お点前披露。



一期一会

【学友会本部】

屋上菜園で収穫した糯米で餅つきをし、餠、黄粉餅を振る舞った。



農具も使ってヨイショ、ヨイショ

特集
第61回

もみじ会

「自然を凝視めて新たな学を」
九月二十九日・三十日開催



学園のもみじにあやかり、もみじ会として日常の研究、学習の成果を発表、展示、地域と結ぶ2日間を紹介する

今年のポスターは二点が採用された。

ポスターデザイン
生活芸術科2年 成田 真穂さんポスターデザイン
生活芸術科2年 齋藤 友貴さん

附属高等学校

教科や学年組織、生徒会（部活動）三十一パートで成果発表され、充実した内容が観覧者の足を止めた。

【食物科】

どんぐり食堂を開設。調理実習の成果を示した美味しいお食事。



カレーライスをどうぞ

【美術科】

授業の課題作品の展示発表。



習作が並んだ展示会場

【第1学年普通科人文文学コース】

テーマは「縄文文化に迫る」。日本文化の起源を土器制作で体験。



土器の制作過程を体験

【音楽科】

一・二・三年生による「もみじ音楽会」。

調子が大切
協力を要するアンサンブル演奏

生徒会

十七部が活動の成果を発表、公開練習で実力を示した。

【百人一首カルタ取り大会】

十一回目となる学年別クラス対抗戦。優勝は一年一組、二年一組、三年六組。



耳と目と指先との真剣勝負

【生徒会・バスケットボール部】

第二十四回附属高等学校校長杯大会。優勝は泉崎中学校。



中絶調子で激戦を繰り出す

【生徒会・新体操部】

美の表現を目指して、優雅と力強さ……。



華麗なる団体演技

【生徒会・弓道部】

県内の女子弓道部員を招待しての弓道大会。



近距離で技を競う

【音楽科】

「もみじ音楽会」はすべて学生による運営。ピアノ、独唱、管楽器の演奏が行われた。



管楽器の二重奏で日頃の成果を示す

【文化学科】

テーマは「流行ものの文化史」。民俗学の様々な分野から文化と流行を考察した。



流行ものを発表する学生

【高齢者招待会】

訪問介護員養成研修講座で学ぶ学生が中心となって、ケアハウスで暮らしの方々と招待。高齢者との交流を通して福祉への意識を高めた。



学生の案内で各会場を見学する高齢者

大学・短大友会

学友会は、茶道、食品化学研究、スキー、フォークソング、モダンジャズ研究、ダンス、手芸、タッチフットボール、水泳、手話、スポーツ栄養研究、フットサル、女性史研究の十三クラブが活動の発表・展示を行った。

「生徒会・マーチングバンド部」
マーチングの美しさを楽しさを伝える公開演技。



演奏・演技発表中

【生徒会・体操部】



より強く、より美しく

【生徒会・英語部】

イングリッシュワールドを楽しむ。



ハロウィンの魔女たち

同窓会

大学・短大・高校の三同窓会が合同で企画した「同窓会館設立のためのバザー」。



同窓会の交流を図るバザー

【女性史研究同好会】

初参加。社会に貢献してきた女性の歴史を展示で紹介した。



国生樹子、アンネ・フランクを紹介したパネル

附属幼稚園

「ほくたち、わたしたちの作品展」
好きな絵や想像図の数々といろいろな素材で制作した作品。



よくできてるネ

【子どもたちのプレゼント】



リサイクルで作った玩具を子どもバザーで販売

ティールーム

コミュニケーション・フォーラム



イラスト 佐藤 俊美

今だから……

鍋山 智之

「飯盛山は辛かったね、こっそり泥水飲んだよね」

聞いたとたんはショックだった。附属高校で、山岳部顧問を二十数年間務め、安達太良・磐梯・吾妻・飯盛等へ部員と毎月のように出かけた。

とりわけ恒例の夏山飯盛合宿は、大型のキスリングに布製のテントや米・ジャガイモ等二十数キロを詰め込み、三泊四日で縦走した。レトルトやインスタント食品は高価な時代、重い荷物と戦いながらの山行だった。

その部員達が山岳部OG会を結成した。ここ数年、思い出の場所を廻り、昔を懐かしみワイワイ楽しくやっている。当時のう

ら若き乙女達も今や五十代、しかし賑やかさは相も変わらず。

「泥水」の話は、今年のOG会での暴露話である。当時は「登りは水を飲むな、バテるぞ」「登山は体力半分気力半分」と言い聞かせ、精神面を強調し我慢を強いて来た。

夏の飯盛で水は貴重品、残量を気にしながらの給水で、こっそり飲んだ生徒を叱ったりもした。今思えば、随分無茶な指導だったと自責の念に駆られた。

教え子との絆が今尚続き教師冥利に尽きるが、聞いているうちに「すまなかったな」と、目頭が熱くなってきた。

(総務部次長)



飯盛の山「五色山」

誇り

渡部 真希

私は、大学生活の四年間、福島県内の大学生、短大生、専門学校生で構成されたチームで「よさこい」を続けてきました。

私たちのチームは、福島県の活性化を願い、学生の若さと勢いでよさこいを通して、福島県を盛り上げようと考え、北は北海道、南は静岡県など、県内外に関わらず、様々なイベントに参加しています。

毎年九月には、県内で一番大きなイベントがあるため、夏休みは毎日のように練習をしていました。が、チーム運営に加えての通日の



私たちのチーム

練習は、とても辛いものでした。

しかし、私たちは、私たちの演舞を楽しみにしているお客さんやチームを作り上げてきた先輩方のためにもいい演舞をしようと毎日の辛い練習も乗り越えることが出来ました。

この四年間、一つのよさこいチームで活動し、お客さんを魅了する喜びや人と人の信頼関係の大切さ、支えてくれていた人達がいればどんなに辛いことでも乗り越えることができるということなど様々なことを学びました。

私は、この四年間でよさこいを通して経験してきた全てのことをとても誇りに思っています。

(大学・食物栄養学科四年)

高校生活を振り返って

内山 知裕



内山 知裕

私は附属高校に入学した当時、今までにない不安を抱えていました。希望通りとは言えなかった進路や、中学校時代とは違う環境での生活など、しばらくは疲れきって家路につくような毎日でした。

部活動決定において私は何か新しい事を始めたくて演劇部に入りました。そこで出会った仲間とは今も変わらず楽しい交流が続いています。

二、三年時には部長という大役を任せられ、一年時とは違った自分の在り方を感じ、仲間の大切さや責任を持つ事の大変さを学びました。引退した今でもこの部活動での三年間は何かものにもかえがたい青春の一ページとして心に刻まれています。

学級では二年生から評議委員をしています。最初は不安でいっぱいでしたが、クラスのみんなの協力もあってスムーズに仕事を進めることができました。校内合唱コンクールではクラスの和を發揮して学校長賞をいただくことができました。

進路選択において、私は本短期大学の幼児教育学科を希望し、夢が叶いました。今では附属高校で学んできて本当によかったと思っています。これからは残り少ない高校生活をたくさんの人々に感謝しながら、大切に過ごしていきたいと思っています。

(附属高等学校三年)

私の本棚

大森莊蔵著

『流れとよどみ 哲学断章』

産業図書

郡山女子大学知期大学部 准教授 齋藤 智志

「私が試みたのは、いくつかの哲学的問題、あるいは哲学的困惑とでもいうべきものを、それが生まれてきた元の場所である日常生活の場に返してみることだった。およそ哲学の気などない明るい茶の間や台所の床板

理科に興味をもたない子どもが多くなったといわれています。いわゆる「理科離れ」の改善に向けて、科学技術立国を標榜するわが国では、様々なレベルでその対策が講じられるようになっています。その一環として、自然・科学体験の不足が懸念されている幼少期の子どもには、実に多様な体験プログラムが学内外で提供されるようになりました。

体験プログラムを活用しなくても、テレビを見ればショー仕立ての科学実験が私たちに楽しませてくれます。このように、私たちの周りには自然・科学体験の機会が確かに増えていくといえるでしょう。

ところで、子どもは生活する世界にその子なりの意味を見出して生き存在する。だとすれば、自然・科学体験もまた子どもたちの世界に意味づけされなければなりません。意味づけされれば、これらの体験は忘れがたいものになるでしょう。今後は、

生活診断室

シリーズ①

幼少期の自然・科学体験

郡山女子大学知期大学部 講師 郡司 賀透

自然・科学体験の機会を増やすと同時に、子どもに体験の間にある結びつきを伝えるべきかもしれません。結びつきが分かれば、子どもは体験の全体的意味を見出しやすくなるからです。

体験間の結びつきを伝える有力な手段の一つに、ストーリーがあります。

ストーリーは、子どもだけでなく大人も理解しやすい説明の模式です。いうまでもなく、各々の自然・科学体験の中にもストーリーはあります。理科離れの改善をより実効的なものにするためには、体験の間にもストーリー性をもたせる視点が必要です。

保護者や保育者の皆様には、昨日行った、あるいは明日行うつもりで自然・科学体験や、いまテレビで見ている科学実験ショーの間に、いかなる結びつきがあるのか、オリジナルなストーリーを考えて、幼少期の子どもに語りかけてほしいと思います。

一枚下にはそれらの問題や困惑がよどんでいることを示したかぶたのである。本書の目的を述べた「はじめに」のこの一節は、大森氏の哲学的姿勢の端的な要約にもなっている。哲学の議論が、時として難解であり、一見私たちに縁遠いように見えるとしても、その議論が生い立つてくる現場は、実はまさに私たちの生きている日常にある。むしろ哲学者とは、当たり前にある。むしろ哲学者とは、当たり前にある。むしろ哲学者とは、当たり前にある。

「私が試みたのは、いくつかの哲学的問題、あるいは哲学的困惑とでもいうべきものを、それが生まれてきた元の場所である日常生活の場に返してみることだった。およそ哲学の気などない明るい茶の間や台所の床板

現実はどう違うのか、「音が聞こえる」とはどういうことか、「ものが正しく見える」とはどういうことか、「口ポットは心を持ちうるか」、「心と体の関係はどうなっているのか」といった問題に平易な言葉で、しかしどこまでも鋭く切り込んでゆく。ただし、大森氏の答えを必ずしも正解だとして受け取る必要はない。本書は、あくまでも良質の哲学的懐疑によつて私たちに思索の世界に導くナビゲーターであり、だからこそ何度でも味読されるべき名作となつていくのだ。なお本書は、本学図書館にも所蔵されている。

NEWS 学園ニュース

「天下の学園オリンピック」

第六十一回もみじ会の「学園オリンピック」は九月二十六日、晴天に恵まれ、学生、生徒、園児、教職員、家族会、同窓会、父母会の三千名が参加して開催された。



いっぱい入ったよ。園児の玉遊び



競い合い、高校対抗リレー



一取返す。大学対抗戦

高校マーチングバンドのドリル演奏で開会。入場行進、国旗掲揚、選手宣誓があつて競技に入り、玉入れ(天までとどけ)や綱引き、クラス対抗リレーなどを行った。この後、大学と高校の部に分かれてのプログラムで汗を流した。

もみじ会で「食生活・栄養研究所」一般公開

第六十一回もみじ会で、この春開設された研究所を公開した。62年館二階の研究所内には、「糖尿病にならないために」をテーマに、数々のデモンストラ。生活習慣病等の予防で充実した指導体制をアピールした。

相談コーナーも開設した。



糖尿病対策の献立表を見入る同業者

金賞に輝く高校音楽部 合唱コンクール東北大会

全日本合唱コンクール東北支部大会が九月二十八日、青森市で開催され、本校音楽部が高校の部Bグループに出場した。

持ち前の美しい発声で、課題曲「風に寄せて」自由曲「浮舟」を見事演奏した。その結果、全国で一番の激戦区で金賞を受賞した。全国大会には出場出来なかったが、部員たちには大きな自信となり全国大会への望みをつないだ。



金賞を受賞した音楽部

ぼくとわたしの作品展

附属幼稚園

園児が思い思いの感性で描いた絵画百九十点が建学記念講堂ホワイエに並んだ。

附属幼稚園の「ぼくとわたしの作品展」は十一月二十七日から十二月三日まで開催された。会場を訪れたご家族一般の方は、年少、年中、年長の各組ごとに展示された作品を見て回り、その見事な色づかい、物を見る目、主題の発想等に発揮された豊かな個性に関心しきり。園児の発達段階がわかる展示会であった。



個性豊かな作品が並んだ

「会津なつぷり野菜と地産地消」最優秀賞 高校佐藤佑美さんの作品が高い評価

高校生のお弁当作りを通して地産地消、食育推進を目的とした福島県農業協同組合中央会主催の「食彩ふくしま弁当チャレンジコンテスト」の最終審査会が十月八日、郡山市で行われた。

その結果、三百四十九件の応募から第一位となる最優秀賞には、本校食物科三年佐藤佑美さんの作品「会津なつぷり野菜と地産地消」が選ばれた。また、同科二年清野なつ美さんの「お父さんお仕事ご苦労弁当」が優秀賞を獲得した。

短大二年柳沼智美さん 東京で個展

東京で個展

第一回西会津国際芸術村公募展で学生大賞を受賞した短大・生活芸術科二年柳沼智美さんは、十月六日から東京都内で開催された第二回展の東京巡回展で、ご褒美の「大賞受賞記念展」を開催、初の個展を成功させた。

大賞に輝いた作品「静物」をはじめ「青い牛骨がある静物」「光と私」など十二点が出品され、一般愛好者が、その才能を注目した。



柳沼智美さん

「毛さんへ優秀選手賞」

水泳高飛び等で活躍した毛文輝さん(大学一年)に福島県体育協会から、平成十九年度優秀選手賞が贈られた。



最優秀賞の「会津なつぷり野菜と地産地消」



表彰を受ける佐藤さん

第五十二回郡山市総合美術展 石向麻美さんが写真の部で大賞

石向麻美さんが写真の部で大賞

平成十九年度郡山市市民文化祭主催行事の第五十二回郡山市総合美術展で、本短大生活芸術科の学生十九名(うち二名は卒業生)が入選した。特に二年生の石向麻美さんは写真の部に出品した「内緒話」が大賞。また、洋画の部で奨励賞を受けるなど注目された。

洋画の部の奨励賞には成田真穂さん、小野晴美(十八年度卒)さん。美術賞に鈴木碧(十八年度卒)さんが受賞している。

このほかの入選者は次のとおり。白石裕希乃、大花恵梨、柳沼智美、中島由貴、岡村望美、古川奈保、安齋、藤田葉摘、肥田由佳、山本麻矢、熊田琴美、内田由香里、佐久間彩未、菅原美幸、高橋亜希美。(敬称略)

先輩を訪ねて



服部 えい子さん

●同科40年遠征隊大学部生活芸術科卒業 ●特別奨励老人ホームみかどりの森

本短大卒業後、栄養職員として小学校に勤務していた短歌教室に誘われ、創作に取り組みようになった服部さん。結婚して埼玉県に住むことになり、短歌結社「林間」に入会。昨年、約二十年間の作品をまとめた歌集「素足の幻想」を上梓された。

「人生には困難なときもありますが、鉛筆を握ることで悲しみや喜びを綴り、助けられています。自己満足に陥らないよう客観視す

乳製品利用料理コンクール 本短大金丸由紀子さん 優秀賞

本短大金丸由紀子さん 優秀賞

福島県牛乳普及協会の牛乳・乳製品利用料理コンクールで、本学から応募した短大食物栄養専攻一年生金丸由紀子さんの作品「納豆ケーキ コーヒーソース仕立て」が優秀賞に選ばれた。また、優良賞には同専攻高橋郁恵さんと笠沼文香さん、本高校から清野なつ美さん、内藤えみさん、遠藤真智子さんの作品が選ばれた。

ご冥福をお祈りします

森田 孝氏
元大学・大学院客員教授。
十月十五日逝去。七十九歳。
尾崎幸雄氏
元短期大学部生活芸術科教授。
十月十九日逝去。八十三歳。

る心や目を養うように心がけ、自分の内面を掘り下げていくよう精進していきたいと思っています」。

社会人になってからも、卒業担当教授の山田幸二先生の指導を受けながら子育ての合間を縫って勉強し、管理栄養士と介護支援専門員の資格を取得。「今でも迷ったときは、学園に戻って元気をもらっているんですよ」と語る服部さん。

「専門分野を学んでいくことはもちろんですが、キャンパスで、友人や先生との交流を深め、生涯つき合っていく人間関係を築いてほしいですね」と後輩へアドバイス。

「退職後は、文学部に籍をおいて日本語の美しさをさらに学び、第二歌集出版をめざし創作を続けるつもりです」と、ますます盛んな向学心には敬服しました。

感性を磨く芸術の秋 深く心に

第百五十七回芸術鑑賞講座

「人…そこに深く…佐藤忠良の世界」

多岐に亘る情を抱きつつ、と関口富左衛門氏がリーフレットに記されたように現代彫刻家佐藤忠良氏と本学園は古くから縁があり、氏の初期の傑作「母の顔」は本学園が所蔵。また、美しき少女の瞬時の表情を捉えた愛弟子笹戸



展覧した彫刻展

千津子さんの作品「今 わたし」は建学記念講堂東口前にある。

その佐藤忠良氏の作品三十一一点を展示した第百五十七回芸術鑑賞講座「人…そこに深く…佐藤忠良の世界」が第六十一回もみじ会展として、九月二十五日から六日間開催された。会場の建学記念講堂ギャラリには会期中、学生、生徒、児童を始め一般者ら約三千三百人が訪れじっくりと作品を鑑賞した。

特に、代表作といわれる帽子シリーズの三作、「夏」「あぐら」「立像」が揃って展示されたことは非常に珍しく、素描や絵本挿絵画、レリーフ「大きなかぶ」の展示品にも感嘆の声が聞かれた。

郡山市のある主婦は氏の初期から現在までの作品を「年代を追って鑑賞できて満足。帽子三点もよかった」と興奮されていた。

第百五十八回芸術鑑賞講座

NHK交響楽団トップメンバーによる
ブラサンサンブルコンサート

原の合った演奏で魅了したN響合奏五重奏団

繊細にそして豪快、ブラスタインテットの調子がホール一杯に広がった。第百五十八回芸術鑑賞講座「NHK交響楽団トップメンバーによるブラサンサンブルコンサート」は十月十日、建学記念講堂大ホールで高校の部と大学の部の二回開催された。

ブラスタインテットが「アランフェス協奏曲第二楽章」「ハンガリー舞曲」「ゴッドファーザー」愛のテーマ」など七曲を息の合った演奏で展開し、学生、生徒を魅了した。

ビッグアート

高校三年生が心あわせて制作展示

第六十一回もみじ会で体育館ステージ一杯に飾られたのは折紙のビッグアート「青春愛・附属愛」。

三年生もみじ会の大テーマのもと、三年生全員からの応募作品の原画を大切にしながら、青春の夢や希望、友情に溢れた附属生の高校生活を描いた作品である。

夏休み返上で十クラス全員が三センチ四方に折った紙を一枚一枚ラシヤ紙に貼り付け、それをつなぎ合わせ、縦六メートル、横十五メートルの大きな作品を完成させた。(もみじ会実行委員長 仲西麻美)



青春の輝かさを今、笑顔の光とともに — の折紙が描いたビッグアート

第百五十九回芸術鑑賞講座

ルイジ・ピオヴァーノとイタリア・カンパニア合奏団

哀愁の旋律と魅惑の名曲を聴く

本年度最後となる第百五十九回芸術鑑賞講座はイタリアからのお客さま、チェロ奏者のルイジ・ピオヴァーノ氏が指揮する十五名編成のイタリア・カンパニア合奏団。十月二十五、二十六日の二日間建学記念講堂大ホールで開催された。

第一部はラフマニノフやパオロ・ストイの「魅惑」「セレナータ」等をゲストのソプラノ歌手足立さつきさんの歌唱を交えて奏でた。



感動をありがとう。ルイジ氏(中央)とイタリア・カンパニア合奏団

第二部は足立さんがブッチーニのオペラ「トゥーランドット」「ラ・ボエーム」「ジャンニ・スキッキ」からアリアを熱唱。その通き通った美声は学生、生徒を魅了した。ピアソラの「リベルタンゴ」はピオヴァーノ氏の独壇場。哀愁の旋律をチェロが甘く重厚に奏で、心に沁みる名演奏で余韻を残した。

そして映画音楽メドレー「アイ・ラブ・シネマ」が最後を飾ったが、熱烈なスタンディングオベーションを受けて、アンコールはイタリア民謡の名曲「帰れソレントへ」。盛大な拍手に幾度もカーテンコールが続いた。

足立さつきさん

本学所蔵 紙上美術展 54

池田 満寿夫 作品二点

創学館五階の廊下に飾られている池田満寿夫氏の作品二点。いずれも二〇センチ×一二・五センチの小品。一点は美しき女人を描いたもの。一点は池田氏自身と思われる人物が制作途中、一寸一服といったポーズ。

池田満寿夫氏は一九三四年二月二十三日生。長野県出身。版画家。他に芥川賞作家、映画監督としても知られている。

この作品は、本学園の理事を務められた故安藤尚二氏の愛蔵品だったが、この夏、本学園に寄贈されたものである。



木もれ陽

食品の老舗の「保証」が保証でなく、国の「防衛」を担う人達の様子に驚かされた。私達の安全に関わることに不安を感じる。しかし、その不安はそこからみ生ずるのではなく、本来は重いはずの「保証」や「防衛」という言葉がかくも軽く扱われていることも関係している。

言葉は、性格的に元々伝統的保守的である。しかしだからといって、旧くなったので軽んじてよい、捨ててよいはずはない。その証拠に、使われる言葉と内容の軽重とは別物なものであるから。そのところを教えてくれるのが、高校生なら誰でもが読んでいるはずの中島敦の昭和十七年に成った「山月記」である。それは唐時代の奇伝「人虎伝」を素材にし、「羅西の李徴」は博学多識、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、…で始まる「羅文」である。辞書や注解なくしては読めない。しかし、あの格調高い「羅文」の分かり易さは、分かり易さとは、思想の正しき豊かさであり、言葉の豊満とは別のものであるということも教える。

言葉は、このように思想の正しき豊かさや人生の真理を映そうとその身を捧げている。